

探訪 北の風景 93

秀逸なジャンパーや 超高品質もち米を“産出”

名寄市

萩本和之

「かつては高梨沙羅選手やレジェンド・葛西紀明選手らが練習した台でもありません」と名寄振興公社社長の橋本正道・名寄市副市長は胸を張る。同公社は道北一を誇る全日本スキー連盟(SAJ)公認ピヤシリジャンプを擁するピヤシリスキー場や、なよろ温泉サンピラー(34部屋)を管理運営している。ジャンプエは道内では唯一ミディアムヒル(K点65メートル)とノーマルヒル(K点90メートル)を併設し、ともにサマージャンプ対応施設。さらに人工降雪機付きで専用リフトも完

備している。今季も冬季ジャンプの国内開幕を飾るSAJ公認第52回ピヤシリジャンプ兼第59回北海道新聞ジャンプ大会が160人弱の選手が参加して見事なジャンプを披露した。

スキー場のゲレンデには国際スキー連盟(FIS)公認コースが3本あるほか、ジャンプエ傍にはクロスカントリーコースが完備されている。また日本スノーボード協会(JSBA)公認のスキー・スノーボードスクールも開催されている。「全国屈指の雪質を思う存分に満喫できる」と今や海外にも名寄スキー場ファンがいるという。

市は「冬のスポーツ拠点」と位置付け、同公社は昨シーズンから中学生以下のリフト利用料無料化や幼児向けの「キッズパーク」開設で底辺拡大を目指している。「昨季のリフト利用は市町の家族連れで前年度よりも2割増となりました」といい、ポストコロナを見据えて、スキー合宿の誘致にも、これまで以上に力を入れている。

名寄はもち米生産でも有名だ。市町村別作付面積は日本一。質の高さでもピカ一で、旧名寄地区(2006・3・27名寄市と風連町合併)のもち米はお伊勢さま(三重県伊勢市)の名物菓子「赤福」の原料となっている。これに刺激を受けた旧風連地区で起業、発展したのが現在の道の駅「もち米



もち米加工品がずらりと並び、「行ってよかった『道の駅』ベスト10」(北海道じゃらん)で第1位にも輝いたことがある「もち米の里☆なよろ」。「北海道産業賞」も受賞するなど「もち米の名寄」を全国に発信している

の里☆なよろ」。1989年に旧風連の農家7戸で「雇用創出や付加価値アップ」を目指し、もち米加工を始めた。4年後に有限会社を設立(2006年株式会社化)、翌年から国道40号線沿いに店舗を構え、それを移転させて08年には道の駅となった。業務用丸め餅や切り餅をはじめ、ソフト大福やクリーム大福などを生産、販売。今年は山形県鶴岡市との姉妹都市25周年記念で「山形庄内ずんだ」も商品化した。佐藤勝営業部長は「会社の構成農家は4軒と減ったものの、STVラジオ『日高暗郎ショー』などマスコミや市民らの応援で苦勞しながらも今日の評価を得ている」と述懐している。人気のスポットは北国博物館の傍に置かれてい





ミディアムヒル（K点65メートル）とノーマルヒル（K点90メートル）が併設されているピヤシリシャンツェ。冬のジャンプ大会の国内開幕を飾るピヤシリ兼北海道新聞社杯や吉田杯が行われている



北国博物館の傍に置かれているSL排雪列車「キマロキ」。1976年に当時の国鉄から無償貸与され、市民の手で保存されてきたII写真は同博物館提供



昼夜を問わず天体観測をしている口径50センチの望遠鏡「愛称」きたすばる」。天文台「きたすばる」にはプラネタリウムも完備している

るSL排雪列車「キマロキ」。豪雪地帯の鉄路を守るため雪を40メートル近く飛ばしながら走る雄姿がしのび、5両編成のまま残っているのは、全国的にも珍しい。道外のSLファンも数多く訪れ、吉田清人館長は「北国の生活ぶりや歴史を紹介した館内展示品と併せて観てもらっています」と話す。

もう一つ有名なのが星空の美しさだ。それに魅せられた故木原秀雄氏（元名寄高校教諭）が開設した私設天文台をもとに新設されたのが市立天文台「きたすばる」だ。直径10メートルのドーム式の観測室には公開天文台としては国内2番目の大きさの口径1・6メートルのピリカ望遠鏡（北海道大学設置）、屋外には口径50センチの反射式望遠鏡が完備されている。

へはぎもと かずゆき・元札幌国際大学教授▽